報　告

―マラヤ調査旅行覚え書―

資料探訪，金石調査，都市の歴史，会館と宗祠，言語と教育

日比野丈夫

昨年8月から10月にかけて約2カ月間，マラヤにおける華僑研究の予備調査を行うべき任務をおびて現地に派遣された。香港に到着するとまもなく，あたかも東南アジア各地をまわってこられた平沢前総長と岩村教授とが立ちよられ，各地の事情をくわしくお聞きすることができたのは幸いであった。香港滞在中，わたくしは思いがけなくもジャパン・ソサエティで一夕の講演をたのまれ，その準備や打合せのために意外の時間を費したが，この機会にいろいろな人々にあって有益な助言を受けたことは忘れられない。マラヤではクアラ・ルンプールとシンガポールを根拠地として，ジョホール，マラッカ，セレンバン，イポー，タイピン，ペナン等の各都市とその周辺を約40日にわたってみてまわった。帰途にはバンコックで数日をすごし，いったん香港にもどったのち台北を経由して帰国した。その間いたるところで，多くの便宜をあたえられ歓待をこうむったことに対しては，実に筆舌につくしがたいものがある。

思えば，8月，9月のマラヤは，日本にいてはとうてい想像もつかないほど多事なときであった。かねてから懸案であったマレーシア連邦の成立が，インドネシアやフィリピンの反対で行きなやんでいる最中，シンガポールでは戦時中における日本の残虐行為に対して血債を追求するという動きがにわかに強くなってきた。わたくしがシンガポールについたのは，そのための華僑大会がいよいよ開らかれることになった8月25日の前日であった。町中すきまもなく貼られた排日ポスターや，戦時中，日本軍によって行なわれたという目をおおわせるような拷問の写真を満載した新聞をみると，事の重大さに驚くとともに，身の危険さえ感じて胆を冷したものである。幸いにして25日の大会は政府当局の適切な措置によって，いちおうことなく終り，やがてマレーシア連邦の成立は9月16日に決定したことが発表されると，マラヤ全土はたちまちお祭り気分に包まれてしまった。ことに8月31日はマラヤ連邦創立の第6周年記念日にあたるところから，これとは直接関係のないシンガポールでさえ，官庁も学校も休んで前景気を添えるというふうであった。そうして，マレーシア連邦が成立する9月16日を，わたくしは首都クアラ・ルンプールで迎えたのである。その前夜からの同地の賑わいなど改めてのべるまでもあるまい。

しかし，このような表面の変化にもかかわらず，日本に対する反感は依然としてくすぶりつづけていた。シンガポールの漢字新聞には，日本軍の暴虐行為についての追憶座談会の記事が連載されていたし，それぱかりでなく排日的な空気はしだいにマラヤ各地にひろがっていったのである。従って，はじめから予定していたことを全然中止したり，いま少し聞きたいと思うことがあっても，中途で引きあげたようなことも少なくない。つまり，じっくりと腰を落ちつけて調べるのには多くの支障があったのであるが，それにもかかわらず，この時期に得た体験は将来の調査にきわめて有意義であったと思う。わたくしの親しくつきあった華僑の人々は，学問のことはまた別なのだからあまり気にしないようにとか，もう20年も前のことだからお互いに忘れるようにしようではないか，などといって，ややもすると沈みがちな心を引きたててくれた。ともかくもいちおうの目的をはたすことができたのは，まったくこれらの人々のおかげである。

資料探訪　かねてから興味をもっていたのは，東南アジアあるいはその地の華僑に関する中国文献はどれくらいあって，どこにいちばんよく集っているかということであった。香港に比較的長く滞在したのは，これについての見当をつけるとともに，できるだけ集めるのが目的であったが，これは失敗に終ったといってよい。というのは，香港ではもはや一般の古書は払底をつげ，中華民国時代のものでさえきわめて少くなっていた。当地は今日，東アジアにおける出版の一大中心であって，ことに漢字の出版物はマラヤ方面で発行されるものも，ほとんどここで印刷される。古書の複製もさかんで，そのような新しい出版物が中共からきたものとともに町に氾濫している。本屋の数は相当に多いのであるが，古い資料を採集することなどは，とうてい10日や半月の短期間では不可能なことがわかった。マカオはもう少しこまめに歩いて，本屋あさりをすれば，あるいは収穫があったかも知れない。シンガポールやクアラ・ルンプール，ペナンも香港と同様であるが，そこでは中共の新しい出版物がみられないのが違っている。

図書館はまず香港で香港大学と新亜書院のを見学した。前者の漢文書籍は馮平山図書館に一括されていて，相当の善本もあるらしいが，ある事情のため内部を自由にみることができなかったのは残念である。新亜書院は13年という新しい歴史にもかかわらず，いちおうのものがそろっており，アメリカ国会図書館にある北平図書館善本のマイクロフィルムが全部そなえられているのに感心した。しかし，わたくしの求める華僑関係の文献や，東南アジアの現地出版物が，日本の図書館に比べてそれほど多いとは思われなかった。この方面の個人的な蒐蔵家としては，おそらく香港大学の羅香林教授が第一人であろう。氏を私宅におたずねしたが，数日後に日本を経由してアメリカに向われるということで，ゆっくりお話をうかがうひまもなく，再会を期したしだいである。

シンガポールにはシンガポール大学の中文図書館がある。これは1953年，同大学の文学院に中文系が新設されたとき，華僑有志の寄附金によってなったもので，その蒐集には賀光中教授があたった。ようやく10年になった図書館としてはすこぶるととのっているが，他に類をみないのが現地発行の漢字新聞である。その数は28種にのぼり，シンガポール最古の新聞である叻報（Lat Pau）のごときも1887年から1932年までほとんどそろっていて，マラヤの近代華僑史を研究するものには大切な宝庫といってもよい。南洋大学の図書館は一般の漢文書籍はいちおうそろっているが，まだこれという特徴はないようである。大学そのものの創設が1956年であるから，それもやむをえまい。しかし，この大学は華僑教育の最高学府であり，東南亜研究室も早くからつくられていることでもあるから，もっと華僑に関する書籍を蒐集してもらいたいものである。とくに現地出版の書籍はもれなく集め，どんな零細な文献でもすぐ利用しうるような設備ができるとありがたい。この点はシンガポール大学に対しても，同様にのぞむところである。国立ラッフルズ図書館の英文文献の蒐集，とくに尨大な古文書が華僑研究の根本資料であることはいうまでもないが，今回はそれを閲覧するだけの余裕がなかった。

南洋大学図書館

華僑資料の蔵書の富といえば，内外の学者がこぞってまずシンガポールの陳育崧氏に指を屈する。氏の多年にわたる蒐集は実にすばらしく，誰もまだその全貌をみたものがないというほどである。氏は多忙の中をわざわざ宿舎までわたくしをたずねてくださったのであるが，現在その資料はすべてラッフルズ図書館に移置し，南洋研究室ともいうべきものをつくる目的で整理中だということであった。目録作成にはなお半年を要するとのことで，残念ながらその完成の一日も早からんことを祈るほかはなかった。陳育崧氏と双璧とも

いうべき，シンガポールにおける東南アジア研究の大家が許雲樵氏である。すこぶる研究範囲の広い人で，著述も多方面にわたっている。氏の書斎におもむいて，いろいろ資料についての説明をきいたのはきわめて有益であった。

クアラ・ルンプールのマラヤ大学の中文図書館は，近年シンガポール大学から重複した漢文書籍をゆずられ，これを基礎にして拡張したものである。従って，まだ基本図書をととのえるのが精一杯という現状であろう。史学系主任の王賡武教授は東南アジア史ないし華僑史研究家としても令名がある。ペナンでは，1952年清貧の中に一生を終えた華僑問題の老大家，故劉士木氏の蔵書が，檳城文庫の名で保存されているということであったが，ついにみる機会を失してしまった。

帰途，台北にたちよったのは，台湾省立図書館に所蔵されている旧日本時代の南方研究所の図書をみるためであった。館長の王省吾氏にうかがうと，書籍は欧文18,000，日文13,000，中文2,000冊，その他の資料6,000部，ほとんど全部が新店の分館に別置してあるということで，時間の関係からやむをえず明年の再来を期した。

金石調査　マラヤ華僑の歴史が明代以前にさかのぼるのは誤りないが，これを現地の漢文資料によってうらづけることは，現在のところ不可能に近い。明代の金石資料としては，全マラヤを通じてわずかにマラッカの墓碑が2点知られているにすぎないからである。

甲必丹李公碑

しかも，みな明末のものらしく，ともに三宝山の中国墓地にあり，1は黄維弘と妻の謝氏の墓碑で壬戌(1621，天啓2）冬，子の黄子および黄辰が立てたとみえる。山の西麓の路辺にあって，そばに民国22年(1933）に修理を加えたさいの記念碑が立つ。これは人目につきやすいところにあるのでよく知られており，郁達夫の「馬六甲遊記」(1940）にも出てくる。その2はただ「皇明」の2字が認められるのみで，誰の墓とも知れないという。別にやはり三宝山の南麓に，ポルトガル領時代に甲必丹の職に任ぜられた鄭芳揚夫妻の墓碑といわれるものがある。この人はつぎにのべる青雲亭の創建者で，1617（萬暦45）年に死んだと伝えられるが，この墓碑がはたしてその人のものかどうかは決定的でないと思う。

つぎにマラヤで古い漢文碑がもっともよく保存されているのは，やはりマラッカの青雲亭である。この寺は俗称を観音堂ともいい，廟堂街（Temple St.）にあるマラヤ最古の中国仏教寺院として知られている。その創立は明の隆慶年間（1567—72）という説もあるが，もう少しのちのことであろう。ここにある最古の碑は「甲必丹李公済博懋勳頌德碑」とあるもの，文によれば李公いみなは為経，福建の泉州同安県の鷺江の生まれで，明末に国難を避けて当地に移住し，オランダから甲必丹に任ぜられた人である。立碑の年記は「龍飛乙丑」とあり，清朝の康熙24（1685）年に相当するが，これは明末の遺士が清朝の正朔を奉ずることをいさぎよしとせず，あえてこのような特殊な年号を用いていたと考えられている。つぎが「大功德主曽公頌德碑」で，曽公いみなは其禄，李為経の女婿にあたり，そのあとをついで甲必丹となった人，年記は「龍飛丙戌」とあって，康熙45（1706）年にあたる。第3が「重興青雲亭碑記」で「龍飛辛酉」の年記がある。これは嘉慶5（1800）年に相当し，甲必丹の蔡士章らがこの寺を重修した由来を記している。このほかにもなお道光25（1845）年，咸豊2（1852）年以下の重修碑があるが省略する。

三宝山の西南に宝山亭という寺院があるが，門前に鄭和が当地に駐屯したさいに開いたという三宝井があるので名高い。ここには乾隆60（1795）年の年記のある「建造祀壇功德碑記」が立っている。文によると，三宝山はすでに60年来華僑の墓地であるが，それまで祠堂がなかったので，このとき上にのべた蔡士章らが

新しくつくったという。ここにはなお嘉慶6（1801）年の重修碑もある。

マラッカのほかでは，ペナンに嘉慶時代の碑が2面あるのが注意された。1は広福宮の嘉慶5（1800）年「創建広福宮捐金碑」。広福宮はペナン市の中心，椰脚街（Pitt St.）にある華僑のもっとも信仰を集めている廟で，市外の海珠嶼の大伯公廟の神を迎祀したものである。嘉慶5年というと，ペナンがイギリスの手に帰した1786年から15年目にあたり，すでに当地の華僑が相当な勢力をもっていたことをものがたっている。海珠嶼の大伯公廟には石製の香炉があって，それに乾隆の年号が刻されているということであるが，残念ながら確認できなかった。2は市外の広東汀州墓地にある嘉慶6（1801）年の「義塚墓道碑」。これは当時この附近にしだいにふえてきた広東出身の華僑墓地の参道をつくったときの記念碑である。はじめは主として広東人だけの墓地であったが，のちに福建の汀州出身者の墓も加わったらしく，その共同墓地を管理する組織が生まれ，これが基礎となって今日のペナンにおける広東暨汀州会館ができたのである。

シンガポールになると，町の成立も新しいだけに古碑類も少ない。嘉慶はもとより道光時代のものもないらしく，市内でもっとも有名なのは履門街の萃英書院の碑である。立碑の年は咸豊11（1861）年であるが，文によるとこの学校は咸豊4（1854）年の創立で，華僑の学校としてシンガポール最古の歴史を有することがわかるのである。

都市の歴史　マラヤの都市は，人口のほとんど6～7割までが華僑によって占められている。その歴史はマラッカが16世紀にさかのぼるほかは，みな18世紀末以後の成立できわめて新しい。1786年から開かれたペナン，1819年に誕生したシンガポールなどはまだ古い方で，クアラ・ルンプール，イポー，タイピン等が都市として発展するのはさらにのちのことである。

いったい，ポルトガル領時代にマラッカにいた華僑は3～400人に過ぎなかったろうといわれ，オランダ領になってもたかだか2,000人前後であったと考えられる。マラヤ全体を通じても1万人には達しなかったはずであるから，ペナンやシンガポールで初期に活躍した華僑はみなマラッカから出ていったものである。ペナンの建設当時，イギリスはマラッカの華僑を誘致するのにずいぶん苦心したといわれる。今日マラッカ

マラッカの荷蘭街

には河の東，海岸の北に荷蘭街（Heeren St.）というのがあって，中国式の古風な家並がつづいている。まったく広東や福建の古い町にきたような錯覚にとらわれるが，ここが何代にもわたって住みついた華僑の町なのである。シンガポール草創期の華僑事業家として著名な陳金声も，数代前に福建の永春からここに移った家に生まれた。シンガポールではさきにのべた萃英書院を立てたのをはじめ，最初の上水道を個人の寄附によって建設した人として知られている。いま当地の華僑はすでに中国語を忘れ，もっぱら英語とマラヤ語を話しているものがあるが，冠婚葬祭などには本国にもみられない古い風俗を守っているものが多い。

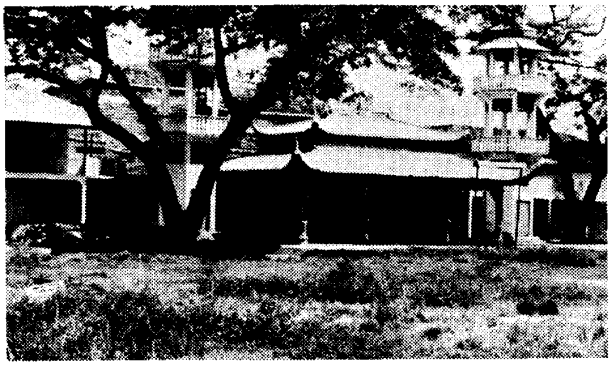
それはともかく，今日のマラヤ華僑は大部分が18世紀末イギリス勢力が進出して以後，驚くべき速さで増大したものである。例えば，ペナンにしても1820年の華僑人口8,270（総人口28,849）が1860年には28,018（総人口59,956）となり，今日では総人口23万余，その中の70%が華僑といわれる。シンガポールにいたっては1821年には華僑人口1,159（総人口4,724）であったのが1860年には50,043（総人口81,734）に増加し，今日では実に総人口170余万中，華僑は75%を占めるものと考えられている。このような都会地をのぞけば，華僑労働者は，ほとんど金鉱と錫鉱とを求めて半島の奥地深くわけ入り，19世紀の前半から各地に中心をつくりはじめた。

セランゴールとペラクの両州は，今日も錫の産額がもっとも多い。セランゴール州の州政府の所在地であり，マレーシア連邦の首府であるクアラ・ルンプールは錫鉱業のために発達したところである。現在その中心は同市南方の Sungei Besi（新街場）であるが，

この附近で最初に錫鉱が発見されたのは，西方8キロばかりの Ampang（暗邦）村であった。クアラ・ルンプールはそこに近く地の利を占めるところから，労働者や商人の集合地として市街を形成しはじめる。ちょうど今から100年ほど前のことで，Klang 河と Gomak 河との合流点に位置するこの町は，ジャングルに囲まれた湿気の多い不衛生な土地であったに相違ない。町の実権者は広東の恵陽出身の錫鉱業者で葉亜来という豪傑であった。やがて，かれと反対派の間には鉱区の利権をめぐって大規模な械闘を生じ，クアラ・ルンプールの激しい攻防戦がはじまる。1869年から1873年にいたるまで奪取されること2回，そのたびに徹底的な破壊をこうむったが，かれは屈しなかった。この町が秩序立った発展をするのは，実に1873年，平和が回復して以後のことであって，葉亜来はクアラ・ルンプールの父といわれている。

なお Ampang 村も今日では比較的ととのった華僑町をつくっていて，立派な華僑の学校もある。とくに注意をひくのはこの地の九皇廟で，平時は広い境内はガランとして参詣人もないが，9月27日前後の廟会には非常な賑わいを呈する。クアラ・ルンプールはもちろん，遠くシンガポールやペナンからも多くの参詣客が集ってくるといわれるが，それはこの地が古く華僑にとってきわめて重要な中心であったことと無関係ではないと思う。

ペラク州北部の Taiping（太平）も，クアラ・ルンプールと同じころに開かれた。ここは古く Kliang Pau（吉利包）といわれ，やはり錫鉱業の中心であった。この地の鉱脈が発見されたのは1850年のころで，これを目あてに殺到した華僑労働者は，広東出身者を主とする義興党と客家を主とする海山党という両秘密結社に属していた。1862年鉱区の縄張り争いがもとで，両党の間には激しい械闘が起り，戦線はペラクからペナン一帯にわたって10年間もつづいたのである。これが結末をつげたのはようやく1874年のことで，この鉱区は首領鄭景貴のもとに海山党の手に帰したが，太平というのはこのとき平和の到来を祝福してつけられた名である。太平が都市として発展するのはこれからであって，今日広い公園の中につらなっているいくつかの湖は，往時の錫鉱採掘のあとを整理したものなのである。



アンパンの九皇廟

ペラク州の州政府の所在地 Ipoh（怡保）の発達はさらに遅れる。今日この州の錫の産額はマラヤ第一で，総額の半分以上にのぼり，Ipoh はその広大な鉱区の中心を占めている。しかし，この方面の錫鉱は交通条件の悪いためにきわめて開発がおそく，1880年代の中ごろになってようやく華僑労働者の進出がはじまったのである。Ipoh が都市として発展するのはまったくその結果であって，それまでは地図にもあらわれかなった寒村が，にわかに都市の形態をなしたことがしばしば旅行者を驚かしている。1888年には華僑の人口だけでも2,000になったといわれ，1893年には11,000に増加し年々急速な発展をとげた。今日では125,000で，シンガポールをのぞけば，クアラ・ルンプール，ペナンにつぐ大都市となったのである。

会館と宗祠　初め多くの華僑たちは外国へ渡っても，本国から何の保護も保証も受けられなかったのであるから，自分で防禦手段を講じなければならなかった。そのためには同郷人の互助親睦団体である会館の組織や，同族間の団結中心である宗祠などがつくられたのである。強固な秘密結社が発達したのも，同様な理由からであった。いったい中国人は本国にいるときから政府や役所と関係をもつことをきらい，町の中に住めば一生のあいだ役所の門をくぐらず，町の外に住めば役所のある町へ行かないですますというのが一種の理想的な生活であった。というのは，役所と関係を生ずれば必ず貪欲な役人や胥吏にしぼりとられるからであって，普通の人は極力役所を忌避したのである。その代り，かれらには自分たちのことは土地の有力者や同族間で解決するだけの自治能力をもっていた。このような習慣から華僑の多いところには，どこにも会館や宗祠がみられるのであって，かれらは多くの問題をこの組織によって解決し，対外的な問題が起ったばあいにも，在外公館以上にその能力に信頼しているの

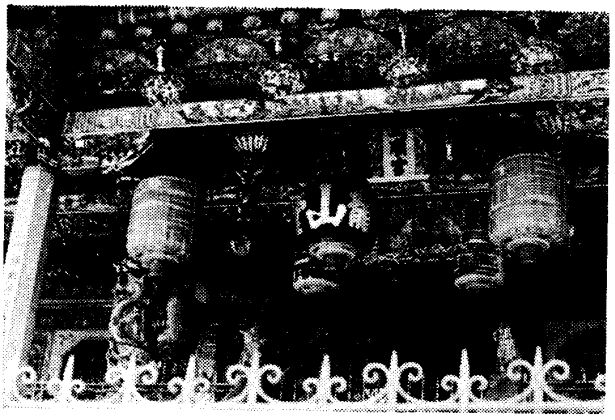
である。

ことに都市では同業商人の組合が盛んで，この連絡事務所を公会とか公所とか称する。その種類は多いが，かれらはゴムなら福建人，錫なら広東人，旅館などの接客業は海南島人といったふうに，職業には地方差が濃厚であるから，同時に同郷人団体的な性格をもつことが多い。これらをひっくるめた大きな組織が商会である。シンガポールのものは中華総商会といい，1906年に清朝政府の指導によってできたもので初めは中華総務商会といったが，のち現在の名に改められた。このような組織はその他の都市にもあって相互に横の連絡をとり，外貨排斥運動や戦時における本国救済資金募集なども行ったのである。今回シンガポールで行なわれた日本に対する血債追求大会は，もっぱら当地の中華総商会が中心となったのであった。従って，この関係の人々にあって多くのことが聞きたいというのは，当初からの目的の一つであったが，別の機会にゆずらねばないはめにおちいったのである。

同じ職業に同郷の人々が集中しやすいように，町によっても地方差はきわめて濃厚である。例えば，シンガポールやペナンは福建人が50%，クアラ・ルンプールは広東人が50%を占め，イポーになると広東人が70%にも上るという。それで，同郷団体である会館も無数にあってよいわけであるが，やはり福建と広東とがもっとも多く，小は1県から数県連合，一府あるいは数府連合のもの，大は1省を包括するものがある。いったい会館の成立は異国にある同郷者の相互援助を目的としたもので，新渡来者には住宅を提供し職業を斡旋し，貧困者があれば救済し，学校を経営して子弟を収容し，死者には墓地を用意するなど，その事業は無限といってよい。中国人の習慣として墓地の維持と管理は非常に重要視するので，共同墓地の経営が会館成立のもとになった例は少なくなく，前にあげたペナンの広東暨汀州会館などがそれである。会館の建物は同郷の富裕なものの寄附によるのが普通で，たいてい不動産をもっており，これを運営して維持費にあてている。建物を入ると正面には関帝や天妃など，同郷人がもっとも共通に信仰している神をまつり，事務所や講堂があり，周囲の壁には寄附金の額により大きさの違った肖像写真がずらりとかけてある。2階などには宿泊設備のあるところも多い。春秋の祭りをはじめ諸種の式典や親睦会が行なわれるときは別であるが，平時はいたって静寂である。今日では会館によってはそのような公共の会合はほとんど行なわれず，内部をしきって貸しビルのようにしているところもみられる。

このような同郷組織は対象となる地域が狭く，規模が小さければ小さいほどまとまりやすいわけであるから，ともすると個々独立したものとなってしまう。しかし，それでは勢力が弱いので，地方的に大きくまとまろうとする傾向もあるわけである。シンガポールでもっとも古い会館は福建会館である。源順街（Telok Ayer St.）の天福宮にあるが，この廟は道光20(1840)年ごろ福建人によって創建されたもので，かれらの信仰する媽祖をまっている。今日シンガポールにおけるもっとも盛大な廟の一つであって，会館はこの神の信仰を媒介として1860年に成立したものである。当時は華僑の数も少なかったので福建省という大きな地域が対象となったのであるが，のち渡来者が多くなるにつれて小地域を対象とする会館がつぎつぎに生まれ，分裂の傾向をとったことと考えられる。これに対して第2次大戦後に成立した全マラヤの広東会館の連合体である馬広聯会などは，関係の会館を連絡して強力な組織をつくりあげたものである。マラヤ各地とシンガポールの広東会館15をもって組織され，クアラ・ルンプールのセランゴール広東会館に本部をおいている。その建築は1960年になったコンクリート7階建ての堂々たるビルディングで，Pudu Road にそびえ立つ。わたくしの滞在中マレーシア連邦成立の前日である9月15日，この楼上講堂で広東会館連合第17回の記念式が開かれていた。そこで行なわれた十数項目にのぼる決議の第1条が，「華僑はよろしく中華教育を受くべし」とあったのは今も記憶に新しい。それはともかく，会館に行って聞いてみると，たいてい古い資料は第2次大戦中に失なわれたという答えが多かった。日本軍が直接手を下して破壊したもののほかに，かれらが日本軍の苛酷な追求の材料となるのを恐れて，みずから湮滅させてしまったものもあるのであろう。

同族の団体には某氏公会，某地某氏互相会などいろいろな名称がつけられているが，ほとんどみな本国における守護神や祖先神を中心にまつり，歴代の位碑を並べて祠堂をつくり，同族団結の支柱としている。ペナンでは某氏某堂と称するものが多い。マラヤにおけるもっとも豪華な宗祠として名高いのは，邱氏の龍山堂で道光15（1835）年の建築である。新しい碑による



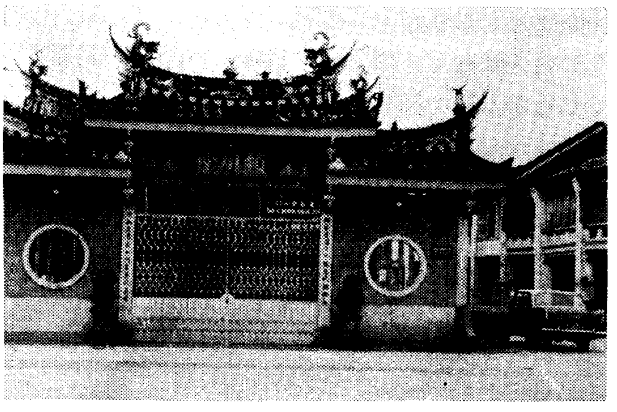
ペナンの龍山堂

と，太平洋戦争中に相当の被害を受けたので1959年に修理を加えたとみえる。本祠の前には広場をへだてて戯台があり，周囲にもいろいろの建物があるが，その一つに宗議所という額がかかっていて，同族会議の場所であることがわかる。外廓にはすべて邱姓の家がずらりと軒をならべているのがみわたされた。邱氏は福建の漳州海澄県出身で，龍山の名は祖先の原住地である泉州の山名にもとづくという。守護神としては東晋の謝安をまつる。ほかに邱氏の別派がつくった文山堂というのがあり，起原は嘉慶15年にさかのぼるが，祭神はやはり謝安である。これら邱氏の宗祠の建築や修理には，義興党の大立物として有名な邱天徳が活躍しているのが注意された。その他，泉州恵安県の林氏の九龍堂，厦門の楊氏の植徳堂，漳州海澄県の謝氏の宗徳堂などがあるが，九龍堂では祖先神として媽祖をまつっている。伝説によると，媽祖は宋代の人で姓を林といったからである。ペナンでみた宗祠のうちには，李氏宗祠だとか3姓共同の辛柯蔡宗祠などいう，近代的なコンクリート建築もあった。

やはりペナンの陳氏潁川堂は漳州出身の陳氏の宗祠で，祖先神としては唐代の漳州刺史で開漳聖王の名で知られる陳元光をまつる。規模はあまり大きくはないが，周囲には陳姓のものが軒を並べて住んでいる。潁川堂が有名なのはここに潁川学校という私立学校を附設し，一族の子弟を自力で教育してきたことである。その卒業生をもって組織せられた陳氏校友会の勢力も大きい。近年学生が多くここでは狭隘をつげるにいたったので，1960年別の地にコンクリート3階建ての堂堂たる校舎を新設したが，その費用はすべて陳氏一族の寄附によったのである。

言語と教育　言語といえば，ほとんど広東語しか通じなかった香港からマラヤにきてみると，料理屋のボーイや人力車夫にいたるまで北京語がよく通じるのですっかり安心した。安心するとともに，中華民国以来の国語奨励の効果と教育の力の偉大さとに驚嘆したのであった。マラヤにおいて華僑の学校が生まれたのは，すでに100年以前のことであるが，初めはみな小規模な私塾程度のもので，しかも各地方の方言しか用いなかったから，連絡も統一もとれなかったようである。もともと華僑はほとんどが無学な労働者や高等の学問を必要としない商人たちであった。そのうえ，本国の出身によって広東，福建，潮（州）汕（頭），客家の4種，あるいはこれに海南を加えると5種の言語に大別され，相互の意志の疏通を欠くばかりか，風習も異なるので，それがもとになって対立反目がたえなかった。また古い華僑の中には英語教育を受けてしかるべき職業につき，しだいに母国語を忘れるものもできつつあったのである。

このような状態をまのあたりみて，マラヤの華僑に母国の文化を自覚すべきことを説き，学校教育の必要を強調したのは，戊戌の政変後ペナンに亡命した康有為であった。同地の極楽寺に行くと，かれが達筆をふるった「勿忘故国」の4大字が，大きな自然石に深く刻されているのが印象的である。康有為の影響によってマラヤ各地に設立された学校は相当な数にのぼった。民国革命にあたって多数の華僑が孫文一派に援助を惜しまなかったのも，そのために母国に対する関心が強化された結果とみてよいであろう。中華民国が成立すると，かれらはますますその存在に対して自信を高めるとともに，本国政府もこれを高く評価するようになった。近代的学校の設立は第一次世界大戦後の不



ペナンの潁川堂

況によって一時衰えたが，国民政府の成立後は華僑教育の指導に非常な熱意を示し，北京語を標準語とする国語統一と中華民族主義の昂揚を基本方針としたのである。このような植民地政府の立場とは相いれない教育も，イギリスの寛容な態度によっていちおうの成果をおさめた。しかし，教科書はすべて本国で編集印刷されたものであり，その中には公然と反英記事がのっているということではイギリス側も黙過することができず，華僑学校に対する政府助成金の交附に条件をつけ，あるいは監督制度を厳重にするなど対策を講じなければならなかったのである。

第２次世界大戦が終って，マラヤ連邦が成立し，シンガポールが自治州となると，マラヤ化の立場から新たに華僑教育が問題となってきた。マラヤ語が政府の公用語とさだめられ，英語は当分の間併用することを認められたが，中国語は除外されてしまった。やがては中国語教育をできるだけ制限する傾向に進むのは明らかであって，マレーシア連邦がその方針を強化することは疑いない。しかし，知識水準は全般的に高く，自己の文化に強い自信をもつ華僑は，いろいろな立場からこれに抵抗を示している。例えば，シンガポールには華僑学校の教師によってつくられた「教師雑誌」という月刊の漢文誌があるが，それには政府側の委員と教師の代表者たちとの間に行なわれた中国語教育に関するきわどい一問一答を見ることがある。今日政府の首脳部は相当数の華僑によって占められているが，ほとんどが中国語よりもむしろ英語の達者な人たちであるということも忘れてはならない。しかし，かれらがその地位を維持して行くには，一般華僑の支持が必要なのであって，そのためには中国語ができなくてはこまる。シンガポールの首相である李光耀（Lee Kuan Yew）氏は，イギリス教育を受けた人で，労働運動の指導者として今日の地位を獲得した人である。もともと中国語は不得手だったのであるが，ここ数年学習を重ねて演説も中国語でするようになったのは周知のことである。このようなマラヤ化政策と中国文化との複雑な関係は，まだここ当分の間つづくことであろう。

これを象徴しているかのごとく思われるのが，シンガポールの南洋大学の問題である。この大学は永年にわたる華僑の念願が実をむすんで，1956年中華教育の最高学府として設立されたものであった。その設立には，多くの富豪はもちろん人力車夫にいたるまで，血のにじみ出るような献金をして応援したといわれている。しかし，政府経営のシンガポール大学にくらべて教授陣容が貧弱であるとか，設備が悪いとか，あるいは基金が不安定であるなどいう理由で，しばしばその改革が論議せられた。政府側には故意と思われるまでにその内容について非難する人もあれば，第１回の卒業生が出るころになって，シンガポール大学の卒業生と同様の資格を与えることはできないという意見も出たほどである。このようにして南大問題は一般華僑の大きな関心の的となったが，たいていのばあい良識的な解決が行なわれ，大学側にも自発的に改革する動きがあらわれて，協調しようする気運に向っているのは喜ばしい。政府側も華僑側ももっと柔軟な態度をもって，将来における教育の発展を考えるべきであろう。それにしても，今日もっとも困ったことは，当地の華僑が表面は本国大陸と遮断されていることである。40才以下の人は大陸に渡ることを絶対に禁止されているという。まして新しく教師を本国から迎えることなどはできない。中国語そのものにしても時代とともに変化して行くのは事実である。華僑が独自の文化を創造するだけの力がないとすれば，いったい中華教育の基礎をどこにおけばよいのか，これこそ，かれらにとって第一の重要問題であると思うのである。